

もうすぐ絶滅するという紙の「本」について

—「本 de 自分史」への追伸—

脇 忠幸¹・竹盛浩二²・若松正晃²

(¹人間文化学科 ²大学教育センター)

紙の本の存在意義とは何だろうか。この問いは同時に、「本を読む」とはどういうことなのか、という問いを生み出す。これらを明らかにするために、三名の論者があるイベントを契機として思考し議論したことを改めて論述する。三者三様の各論から導き出されたのは、紙の本が持つ身体性と時間性という二つの特徴であった。だが、それが紙の本／電子書籍の将来にどのような影響を及ぼすかについては意見が分かれた。

【キーワード：電子書籍、身体性、物語、「読む」こと、時間性】

1. 問題の所在

「本が売れない」と言われて久しい。出版科学研究所編（2014）によれば、書籍販売額は1996年をピークに低落傾向にあるという。ピーク時に約1兆1千億円あった販売額は、2013年時点で約8千億円にまで減少した。「8千億」という数字だけ取り上げれば、一概に「売れない」とは言い切れないだろう。たしかなのは、「以前に比べると売れなくなっている」ということであり、その事象に対する漠然とした危機感が漂っていることである。

たとえば、池澤編（2010）は「本は、これから……どうなるのか？」という一文から始まる。この一文が有効な問いとして成立する（しかも出版される）こと自体、本をめぐる危機感の存在を表している。もちろん、この危機感には社会のすべての成員に認められるものではない。池澤編（2010）においても、「電子書籍という新しい考え方の先には、本という文化、読書という文化がつくってきた、ゆっくり、という時間をどう設計してゆくかという見通しが、またどうしようもなく欠落しています。」（p.61）と危機感を表明する者（長田弘）もいれば、「書き手のわたしは、本という媒体がなくなっても痛くも痒くもない。」（pp.39-40）と考える者（上野千鶴子）もいる。

本をめぐる危機感には、多くの場合、前述の長田氏のように「紙の本（アナログ） - 電子書籍（デジタル）」という二項対立で説明される。たしかに、総務省（2015）によれば電子書籍市場は拡大の一途をたどっている。2003年に約18億円だった市場は、2013年には約936億円へと成長した。ここに書籍の低落傾向を重ね合わせると、本＝「もうすぐ絶滅するという紙の書物」（Eco & Carrière 2009の邦訳タイトル）という認識が生まれるのも納得がいく。

しかし、そもそもなぜ紙の本は「絶滅」してはいけないのだろうか。「売れない」言説を産出し、同時にその言説空間に漂う、この漠然とした危機感はいかに根ざしたものなのだろうか。この問いは同時に、「本を読む」とはどういうことなのか、という問いを生み出す。換言すれば、紙の

本を読む行為が日常から消えることで、同時に失われるものは何かということでもある。

本稿の目的は、これらの問いへの回答を導き出すことにある。ただ、それは唯一の絶対的な正答を意味しない。なぜなら、「本を読む」ことが相互作用の産物だからである。いつ、誰が、どのような状況で、どの本を読むのかによって、「本を読む」ことの意味は変化し戯れる。かつてニーチェが「遠近法的 (Perspektiv)」(Nietzsche1886, 1887) と呼び、シュッツが「多元的現実 (multiple realities)」(Schütz1945, 1954) を見た、解釈の提示と相対化の往還によってこそ、この問いの回答は導き出し得ると考える。

池澤編 (2010) もこの問いに答えようとした試みの一つだが、本来こうした試みは大学の研究者が先導すべきものだ。私たち大学の禄を食む者の仕事は、無批判に時流に乗ることで、新しいものへの脊髄反射的な否定でもない。時流や趨勢に潜む「多数者の暴虐 (tyranny of majority)」(Mill1859) に警鐘を鳴らし、社会の変化を論理的に考察することこそ、私たちが担う社会的役割の一つだと考える。紙の本の「絶滅」が「情報伝達の電子化の趨勢からほぼ必然的なこと」(土屋俊; 池澤編 2010, p.133) であるなら、私たちはその趨勢の功罪を社会に提示する必要がある。徹底的な追究なくして「本 (を読むこと) は大切だ」と言ってみても、それは情緒溢れるきれいごとであり、感情論の域を出ない。

こうした問題意識のもと、筆者たちは過日あるイベントを開催した (詳細は後述)。本稿の背景には、そのイベントの存在がある。まずはイベントの概要を説明し、続く 3 章にて、異なる専門 (脇＝日本語学、若松＝アメリカ文学、竹盛＝国語教育学) と異なる年齢層 (脇・若松＝1979 年生まれ、竹盛＝1953 年生まれ) に属する三者が、それぞれの立場から「本」を論じる。それを受けて 4 章では総合考察を行い、各論へいわば「横糸を通す」ことを試みる。

なお、本稿における執筆分担だが、3 章での各論には氏名を付した。それ以外の箇所については、脇がたたき台を作成し、三者間の議論によって洗練させた後、再び脇がまとめた。

2. 「本 de 自分史」の概要

本稿の契機となったイベント「本 de 自分史」は、2015 年 5 月 27 日 (水) に福山大学附属図書館ラーニングcommonsにて開催された (時間は午後 4 時 20 分～午後 5 時 50 分)。参加者は学内外から約 40 名にのぼり、予想を上回る満員御礼であった。

イベントの趣旨は「自分の人生を三冊の本で振り返る」というものだった。筆者三名はいずれもその振り返りの実践者として登壇し、脇は司会とコーディネーターも兼ねた。つまり、脇が竹盛・若松両氏に声をかけ、三者間で企画を練り上げていったということになる。なぜ、この二人を選出したのか。それは、前述したように、年齢と専門領域による対比を意図したためである。年齢という点では、「脇・若松 vs. 竹盛」という対比が可能であろうし、専門領域という点では緩やかではあるが「若松 vs. 竹盛・脇」(英語 vs. 国語) という図式が描けると考えた。

登壇者にはあらかじめ、下記のアンケートに回答してもらった。その際、他の登壇者の回答を

知っているのはコーディネーター（脇）だけということに留意した。これは、事前に「反応」を用意することを防ぎ、当日の議論を活性化するためである。

今まで読んだ本の中から「この3冊」（ターニングポイントになった本／印象に残っている本など）を挙げてください。ただし、1冊目については「記憶の中で最初に出てくる本」という条件をつけます。

- ①記憶の糸を手繰って過去の記憶を呼び覚ましてください。記憶の糸の端にある「最初の本」は何ですか？
- ②次の1冊を挙げてください。
- ③最後の1冊を挙げてください。

図. 事前アンケート

このアンケートにも工夫を施した。回答の一冊目に「記憶の中で最初に出てくる本」という条件を付した点である。これには二つの狙いがあった。一つは、記憶（＝当日の話題）のスタート地点を揃えることである。単に「1冊目を挙げてください」とすると、挙げられる時点（読んだ年齢）がまったく揃わない可能性が高い。しかし、「記憶の中で最初」となれば、おそらく幼い日のことが取り上げられるに違いない。そうすることで、三者×三冊、そして参加者の中に、少なくとも一つは同じ時点が存在することになり、対比と議論の糸口がつかみやすいのではないかと考えた。

もう一つの狙いは、登壇者（読み手）の原体験／原風景と、その人の「読む」行為に関連性を見出すことである。もちろん、この関連性は仮説にすぎない。しかし、人生の最初にインパクトを受けた本と、「読む」行為に関する嗜好／思考／志向とがどこかで繋がることは大いにあり得る。事実、脇は今回のイベントでその繋がりを「発見」することになった。そのような自己相対化のプロセスを提示することも、このイベントを企画した目的の一つである。

こうして挙げられた9冊を下記表のようにまとめ、プロジェクトで順に発表しながら、それにまつわる体験などを登壇者に語ってもらった。また、話の展開に応じて、登壇者だけでなく参加者にも発言を求めた。参加者の中には、最初の一冊として絵本や図鑑を挙げる者もあり、多様な原体験／原風景に社会の多元性を垣間見ることができた。

表: 登壇者の「この3冊」（アンケート回答結果）

竹盛	脇	若松

①モーツアルトの伝記	①コナン・ドイル 「まだらの紐」	①ヘルマン・ヘッセ 『車輪の下』
②竹内芳郎 『言語・その解体と創造』	②山田詠美 『ぼくは勉強ができない』	②アーネスト・ヘミングウェイ 『老人と海』
③椎名誠 『定本 岳物語』	③ロールズ, J. 『正義論』	③ジェイムズ・ジョイス 『ユリシーズ』

最後の約 20 分を使って、紙媒体の「本」と電子書籍という「本」の比較を試みた。といっても、参加者にこちらの問題意識を投げかけた程度で、いくつか発言を拾っている間に時間切れになってしまった。イベントの企画時からこのようなオープンエンドで終わることになっていたのだが、登壇者にはやや消化不良の感が残った。本稿には、このイベントへの補足、いわば「追伸」という意味も込められている。

イベントの終了時には参加者の方に感想コメントを書いていただいた。自分の 3 冊を挙げるものもあれば、早くも次回開催を求めるものもあり、イベント自体は成功であったと考えてよいだろう。

3. 紙の「本」を「読む」ということ

イベント当日はもちろん、準備期間やイベント後も、三人は紙の本に関する議論を重ねてきた。ここでは、その議論を背景としながら、改めて三人それぞれの論を記述する。具体的な手続きとしては、まず「紙の「本」を「読む」ということ」をテーマにして各人が論述したものを集約した。続いて、その集約した全体を各人にフィードバックし（コメントは付していない）、修正された論述を再びまとめた。いわば往復書簡のような形式で、三者三様の論述をそれぞれ洗練させていったということになる。つまり、以下の論述は三者間における相互作用の産物と言えるだろう。

3.1 「読む」の変容と身体性（脇）

個人的な心情を述べれば、紙の本が消える（かもしれない）ことに危機感を覚える。しかし、その危機感の根源がどこ／何にあるのかは、自分でもよくわからない。それは漠然としたものであり、「なぜ電子書籍ではダメなのか」「紙の本の存在意義とは何か」という問いに即答することは難しい。その回答への手がかりとして、まずは紙の本にしかできない（であろう）ことを考え

てみたい。

私の場合、紙の本への愛着は読むことにあまり比重が置かれていない。購入し、本棚に置かれた時点でかなりの達成感を得てしまう。すなわち、本を収集することこそ喜びがあるのかもしれない。だとするなら、この収集癖に比べ得るのは紙の本だけなのではないか。しかしこの問題は、電子書籍リーダーの中に「棚」を表示すれば解決してしまう。「電子棚」に居並ぶ「本」の背表紙を見て充実感に浸ることも可能だろう。

では、より抽象的な議論に紙の本の運命を託そう。「読む」ということは、過去の「誰か」とのコミュニケーションだと考えてはどうだろうか。新刊本であれば作者とのコミュニケーションであり、古本であればそこに以前の所有者も加わる。特に、古本に残る様々な痕跡（折り目・シミ・ヨレなど）は紙の本ならではのだろうか。だが、これも必ずしも紙の本でなくてもよい。「誰か」とのコミュニケーションという構図は電子書籍でも同様であるし、付箋や書き込みも電子上で可能だからだ。

どうにも電子書籍に分がある、少なくとも紙の本でなければならない理由はないように思えるが、ここで興味深いポイントを見つけることができた。それは古本という存在である。古本という存在と概念は、紙の本ならではのものだろう。電子書籍における「古本」は、すなわち「古データ」ということだ。しかし、『坊っちゃん』のデータに古いも新しいもないだろう。更新日時という意味での新古はあるだろうが、劣化という意味での新古は電子書籍に存在しない。

そう考えると、紙の本における様々な痕跡（折り目・シミ・ヨレなど）と、電子書籍における付箋や書き込みは、同じ「痕跡」でも似て非なるものである可能性が高い。私たちは、紙の本の様々な痕跡に、様々な意味を付与する。意味を付与されない折り目は、ただの曲がった紙でしかない。同様のことは、建築物にも言える。そのままでは単なるコンクリートの塊でしかない存在に、意味が付与されてはじめてそれは「建物」になり、その空間が何らかの意味を持った「場所」になる。その折り重なる意味を私たちは「愛着」と呼ぶのである（Relph1976）。

果たして、電子書籍に愛着を覚えるだろうか。リーダー（ハード）に愛着は持てるだろう。そこに様々な痕跡を見出せるからだ。しかし、データ（ソフト）に愛着を持つことは難しい。もちろん、画面上の付箋や書き込みはその対象となり得るし、久しぶりにデータファイルを開いたときに感慨を覚えることもあるだろう。だが、データそのものに愛着を持つことは考えにくい。消えた書籍データと、新たにダウンロードした書籍データの間、更新日時以外の差異を見つけれないからである。

愛着と関連して、「所有」という感覚／観念にも注目したい。たとえば、紙の本の場合、あなたの『坊っちゃん』と私の『坊っちゃん』という表現は可能だ。しかし、電子書籍（のデータとして）の『坊っちゃん』にその差異は見出しにくい。その所有の感覚／観念を生み出すものは何であろうか。あなたの『坊っちゃん』と私の『坊っちゃん』の差異を生み出すものは、その紙の本に残された痕跡、すなわち身体性だと考えられる。まさに手垢がつくことで紙の本は「私のもの」

になり愛着がわくのであって、たとえば自分のお金で買うかどうかはその源泉ではない（ただし、「自分のお金で買った」という記憶が愛着をもたらす可能性はある）。この高い身体性こそ紙の本に見られる圧倒的な特徴であろう。

目の前に紙の本を置いてみる。手に取って開き、ページをめくっていく。改めて考えると、この「めくる」という行為も紙の本独自のものであり、高い身体性を伴う。たしかに、電子書籍でもかなり近似的な行為を経験することはできる。たとえば、スワイプする際に音を出すことは可能なはずだ。しかし、ここまでの議論にもとづけば、残る差異に大きな意味がある。つまり、「手垢がつく」ことであり、「めくる」手触りであり、それに伴う身体性である。

紙の本の身体性をめぐる論点は、まだ他にもある。それは、「本物」という観念である。ボードリヤールの議論（Baudrillard1984）に代表されるように、現代社会、特に電子メディアの中にいえば「本物の〈本物〉」を見出すことは不可能だと言ってよい。むしろ、そういう性質をもつ世界こそが現代社会であるとも見ることもできる。

だが、本という存在においては、たしかに「本物」は存在する。それは作家の自筆原稿である。自筆原稿が纏うアウラには、あなたの『坊っちゃん』と私の『坊っちゃん』をめぐる差異との共通点がある。言うまでもなくそれは、どちらも高い身体性を持ったものだということである。漱石の自筆原稿にも私の『坊っちゃん』にも、残された痕跡とそこへの意味づけが存在する。このことは、紙の本というよりは、紙という物質に起因するものだろう。

では、電子書籍が持つ身体性の低さが意味することとは何であろうか。そこに大きな問題がなければ、この論の問い自体が疑似問題に過ぎず、紙の本が消えたところで構う必要はない。その考察の手がかりとなるのは、池澤編（2010）に収録された内田樹氏の議論である。内田は、電子書籍の難点として「どこを読んでいるかわからない」ことを挙げ、以下のように続ける。

たしかに（略）紙の本を読んでいる状態を疑似的には経験できる。だが、残り何頁であるかわからない。いったい自分が物語の中のどの部分を、どの方向に向かって読み進んでいるのかわからない。

自分が全体のどの部分を読んでいるかを鳥瞰的に絶えず点検することは（あまり指摘する人がいないが）読書する場合に必須に作業である。というのは、ある文章が冒頭近くにあるか、中程にあるか、巻末が迫ったところにあるかによって、その文章の解釈可能性に大きな差異が生じるからである。（pp.42-43）

読書とは、「読みつつある私」と、物語を最後まで読み終え、すべての人物のすべての言動の、すべての謎めいた伏線の「ほんとうの意味」を理解した「読み終えた私」との共同作業なのである。（p.45）

たとえば、右開きの紙の本を読むとき、右手には「過去」が、そして左手には「未来」が把持されている。右手（過去）と左手（未来）の間に〈いま - ここ〉が立ち現れるのであり、同時に物語世界も成立している。内田の言う「共同作業」とは、こうした身体論的かつ時間論的な文脈で解釈しうるものだろう。興味深いことに、左右の方向と時間概念には有意の関連性があり、日本語母語話者（ただし右利き）では「左＝過去」「右＝未来」という認識がおおよそ成立するという（佐藤 2014）。前述した例とは方向と時間概念が逆であるが、左開きの本も存在することからもわかるように、大きな問題ではない。ここで重要なのは、紙の本で物語を「読む」という行為によって、高い身体性（両手で紙の束を掴む／めくる）を伴う「過去 - 〈いま - ここ〉 - 未来」が立ち現れるということである。

つまり、このとき、物語は「書き手 - 読み手（私）」「過去（の私） - 未来（の私）」という二つの関係が交差するところに成り立っている。電子書籍ではこのうち「過去（の私） - 未来（の私）」が成立困難であり、物語の成立状況に変化が生じることとなる。何も電子書籍では物語世界が成立しないなどと言いたいわけではない。事実、リーダーを使った多くの「読者」はすでに存在している。

問題は、その「読む」という行為にある。紙の本から電子書籍へ移行は、「読む」行為が成立する条件の変化を意味すると考えられる。すなわち、今、私たちの眼前において起きていることは、「読む」の変容として捉えることができる。かつての音楽（といっても、アルバム＝曲の寄せ集めから脱した 1960 年代後半以降）は、レコードを裏返す行為を含んだ物語として成立しており、そうすると作り手は聞き手の裏返す行為を念頭に置かざるを得なくなる。同様に、紙の本は紙のページをめくる行為を含んだ物語であり、作り手は読み手のめくる行為を念頭に置いているだろう。この前提、いわば「読む」枠組み、あるいは「読む」ための文法が変容しつつあると考えられる。

当初、紙の本の優位性という視点で議論を進めてきたが、紙の本と電子書籍の関係を「読む」ことの変容として捉え直したとき、両者の関係性は優劣で測ることができなくなる。かつての音読から黙読への変化も、優劣という文脈では説明できない（Ong1982）。同様に、紙の本に伴う従来の「読む」と、電子書籍に伴うこれからの「読む」に差異はあっても優劣はない。ただ、失われるものがある。それは高い身体性である。この点は優劣ではなく、功罪として議論を深める必要があるだろう。

高い身体性を伴わない「読む」行為は、すなわち電子書籍は、何を得て、何を失ったのだろうか。

得たものは、スピードと簡便さ、そしてわかりやすさであろう。読みたいときに読みたいものを変わらぬ品質で簡単に読めるというのは、電子書籍が高い身体性を伴わないからこそである。雨の日に愛着ある紙の本を携帯することはためられるし、しっかりと把持していないと本が閉じられてしまう。読めば読むほど劣化するし、たとえ読まずとも劣化する。電子書籍は劣化しな

いうえに「過去」と「未来」とのコミュニケーションを志向せず、読み手は作り手だけ意識すればよいのだから、楽でありわかりやすい。

一方で、失ったものは、モノとしての本への愛着であり、「ゆっくりと本を読む」という生活であろう。また、「書き手 - 読み手 (私)」「過去 (の私) - 未来 (の私)」の交点に生まれる複線的な読みでもある。くわえて言えば、本の触感、すなわち手触りも失われる。とすれば、本の存在自体の価値は大きく低下することになる。装丁へのこだわりなど無くなるだろう。だが同時に、本の評価方法がより単純化し、その内容にだけ焦点が当てられる可能性がある。

得たもの=功、失ったもの=罪、という単純な構図は成り立たないかもしれない。少なくとも、失ったものへの悲哀/憧憬を喚起するのではなく、それについての議論を重ねることが必要だ。紙の本と電子書籍のどちらかを一方的に称揚することは、感情論の誹りを免れない。たしかに、紙は（紙質にもよるが）外的なダメージにもいくらか強く、記録媒体としては優秀である。しかし、だからといって電子書籍などの電子媒体を一切拒否することが現実的な対応だとは思えない。退職後の晴耕雨読の生活ならいざしらず、現代社会の「日常」において、電子媒体を避けておることはできない。

「なぜ電子書籍ではダメなのか」「紙の本の存在意義とは何か」という問いに改めて答えてみよう。電子書籍はダメではないし、一方で、紙の本が絶滅するとは思わない。それらは「読む」ことを選択肢の一つとしてそれぞれ価値があるからである。自動車におけるマニュアル車のように、また炭酸飲料におけるサイズの異なる缶のように、紙の本は少数派の嗜好/少数派への配慮として細々と残り続けるのではないだろうか。おおげさに言うならば、紙の本の絶滅は、社会における多様性の喪失を意味するのかもしれない。

3.2 紙の本を読むことについて（若松）

筆者はアメリカ文学、特にアーネスト・ヘミングウェイを中心としたモダニズム文学を研究している。文学を研究しているという点、紙の書籍を好み、デジタルには疎いといったイメージが一般的ではないだろうか。確かに、いわゆる自然科学の研究分野とは違い、書籍や資料に加え、PC、メモ用紙とペンなどのツールがあれば、文学研究のための最低限の環境は整うといってよい。筆者の研究環境もおおよそそのようなものである一方で、筆者は、実生活においてタブレット端末を多用し、大学の授業でも常に用いるなど、タブレット端末は筆者の生活になくてはならない一つのツールとしての位置を占めている。

筆者はタブレットに入れた論文やデジタル書籍を読むこともある。その際にも、やはり紙の書籍を読む時と同様、常にメモ帳がそばにある。したがって、筆者の場合、読む媒体が紙の書籍かタブレットかの違いだけであって、筆者の読書スタイルは変わらないのである。その一方で、タブレットで論文やデジタル書籍を読むことができるようになったことで、書斎で紙媒体の書籍と向き合うことから開放され、読む行為空間の縛りがなくなったことを実感している。この開放感

は、かつて書籍が書齋から持ち出せるようになった感動と類似している。すなわち、タブレットによる読書体験の開放は、活版印刷の発明によって人々が聖書の写本から開放され、聖書を活字で読むことができるようになったこと、それに付随して、これまで非常に高価だったために、その所有が貴族や図書館の特権のようなものであった書籍が、一般に手に入るようになることで「知」が開放されたことと同じような衝撃を我々に与えているのである。

それにもまして、タブレットの最大の利点は、書架にある大量の書籍を一つのデバイスの中に入れ、外に持ち出すことができることにある。たとえば、自身の行動空間を制約される飛行機で長時間移動するといった場面を想像してもらいたい。大量の書籍を持ち込むことの許されない狭い空間であっても、タブレット一つあれば十分にその読書欲を満たすことができるのである。このように、ある面においては、我々はデジタルの恩恵を享受しているといえる。その一方で、筆者には何か欠落している感覚もある。その喪失感はタブレットで書籍を読んでいる際に感じるが多々あり、その何かの喪失感を防ぐためにも、論文は時折読むものの、タブレットで書籍を読むことを止めた。表面的には同じく書かれたもの>ではあるが、論文と（文学）作品への筆者の向き合い方の違いがそのような喪失感を生み出すものかもしれない。そこで、本章では「物語とは何か」という問いからはじめて、本を「読む」行為について考察することで、紙媒体の書籍と電子書籍の共存可能性を模索する。

野家啓一は『物語の哲学』（2005）の中で、アーサー・ダントーのいう「理想的年代記」に対立する「物語文」の概念を「時間的前後関係にある複数の出来事を一定のコンテキストの中で関連づけるような記述である」（88）と説明する。物語ることは、話し手／作者が聞き手／読者に伝える方法であり、その意味では、「物語ること」は一つの情報伝達手段、または一種のコミュニケーション・ツールといえる。物語る内容が世間話であったとしても、話者は聞き手に対して情報を伝達しているといえる。つまり、物語る行為は、現在彼らの目の前で起こっている事象ではなく、過去の事象についての情報伝達であるといえる。このように、話された物語においても書かれた物語においても、そこで伝達・交換される情報は「知」であることに変わりはない。それゆえ、我々は物語ることを通して、「知」を伝達しているといえる。

『ゲーテンベルクの銀河系』（1986）において、マーシャル・マクルーハンが活字を用いた印刷が創り出した新環境を「読書界」（パブリック）と呼び、活版印刷が西欧の近代化に一役かっていることはもちろんのこと、「活版印刷が、個人主義的な社会生活をいとなみ、また自己表現をおこなうに当っての手段の場となってきた」（202）と述べ、印刷技術によって書籍が一般に開放され、人々の読書習慣が急速に広まったことで、個人に「知」をもたらしたことを指摘する。さらに、「不思議なことだが、著書であるとか、偽作の問題にひとびとが関心を持ち始めるのは、消費者中心の文化なのである。」（202）と看破する。つまり、活版印刷技術が読者を獲得すると同時に、その読者によって作者の地位が作品そのものより高められていったのである。我々の周りには様々な種類の書籍があるが、本章で主として取り扱いたいのは、いわゆる文学作品と呼ばれるも

のである。口承であれ、書記であれ、言葉には「物語る」主体の思考が宿る。それこそが、言葉の力といえるものではないだろうか。その言葉の力を最大限に表現しているものが文学作品だといえる。

口承文学や会話のように、〈話す―聞く〉といった行為における話し手と聞き手の時間はほぼ同時的であり、相互に介入することが可能であるのに対し、文学作品をはじめとするエクリチュールにおいては、〈書く―読む〉といった行為における書き手と聞き手には時間の差が存在する。それゆえ、物語は一方的に書かれているために、読者はエクリチュールが語る言葉を（一時的にはあれ）信じるほかはない。だからこそ、物語にはそれを語る（現実に存在する）主体の主観が介入せざるをえない。つまり、文学作品には絶対的支配者としての作者が存在するのである。

その文学作品を念頭にしつつ、作者の死を宣言したロラン・バルトはその小論「作者の死」において、自ら生み出した作品を支配する「作者」に死を与えただけではなく、批評家の死をも宣言する。バルトの批判する批評家とは、「作者」が生み出したテキストの解説を目指すものたちであり、テキストの説明を重要視するものたちである。このように、彼の「作者の死」において、作者の支配力を自分たちのものにしようとするものたちへの批判が繰り返される。そして、彼は「テキストとは多次元の空間であって、そこでは様々なエクリチュールが、結びつき、異議をとねえあい、そのどれもが起源となることはない。テキストとは、無数にある文化の中心からやってきた引用の織物である。」(85-86) と、純粹に創造されたテキストが存在しないことを明らかにするとともに、テキスト内部におけるテキストの無限の反復をも示唆する。そして最後に、「読者の誕生は、『作者』の死によってあがなわれなければならないのだ。」(89) と締めくくる。その「作者」が書いた（であろう）文学作品における読者の誕生をも宣言するのである。つまり、彼は読者に無限の解釈可能性を開いたのである。しかしながら、エクリチュールの総体としてのテキストの読者への開放は、あたかもテキストそのものの所有権が作者から読者に譲渡されたように思われるが、その開放は外面的な意味、つまり解釈が開かれたという意味においてのみの開放であり、作者の創造力までも譲渡する宣言ではない。野家啓一も「テキストに沈殿した意味は、文字言語というメディアを通じて可能的に無限の読み手の前に開示される。つまり、時間空間的に無限の読者によって、『再活性化』される可能性が保証されるのである。」(38) と、テキストに刻み込まれた意味が、読者の解釈によって明らかにされ普遍化する可能性を示唆している。

このように、文学作品の作品世界は絶対的なものとして提示されえない。読者の解釈によって様々な場が存在するのである。J.ヒリス・ミラーも「文学の文学たる所以は、文学が文学自体と文学特有の機能を対象支持する点にあると言われている。」(53) と述べているように、文学は自己説明的にしか文学そのものを語るができない。読者が真摯に作品に向き合った結果としての解釈によって、その場の臨場感を惹起させる力が「物語の力」といえるのではないだろうか。

たとえ物語の媒体が紙の書籍であろうと電子書籍であろうと、語られ方がインクからドットの集合体になっただけであり、言葉そのものがもつ伝達能力 ―その言葉によって語られる我々への

情報伝達— に変化・変質はない。それゆえ、文学作品が電子書籍として世に出ること自体は、文学作品鑑賞の裾野を広げるという意味において、忌み嫌われるものではない。むしろ、その読書スタイル、読書シーンによって使い分ける必要があるのではないだろうか。

例えば、知識を得るため、教養を高めるため、文字を読む愉しみを味わうためなど、我々が書籍を読む動機は様々である。電子書籍の是非を問う際には、このような動機の違いを念頭に議論しなければならない。場所に縛られることなく作品世界を愉しむためであれば、一つのデバイスに大量の書籍を入れて外に持ち出せるという点において優れたタブレット端末で読書をするというのも有益だと考えられるからだ。

しかしながら、我々が紙の書籍を読むときには、我々は文字を読みながら、その書籍の厚みや手触りを感じ取り、その書籍や周囲の匂いや音をも感じ取っている。つまり、我々は触覚、嗅覚や聴覚の刺激を受けつつ紙の書籍を読むのである。様々な刺激が同時多発的に作用することで、我々は思考のバランスをとり、その結果として、脳内で物語世界を再構築しているといえる。だからこそ、紙の書籍がもつその質感を感じつつ物語世界を堪能する読書スタイルが優位といえるかもしれない。

ところで、ウンベルト・エーコはジャン＝クロード・カリエールとの対談の中で次のように述べている。「新しい版を買うことはできるんですけど、愛着があるのは古い版なんです。いろんな色で書き込みがしてあって、その色を見れば、いつどんな時にどの箇所を参照したかが履歴として見えるわけです。」(エーコ 26) 彼の言葉が示すように、紙の書籍には所有者の記憶を呼び起こし、過去の自分自身を現在の自分自身に投影できる力もある。

マンガのデジタル化が進んでいる一方で、子ども向けの絵本が売れているようだ。紙の書籍を購入し読むという行為が意識的か無意識的かはさておき、我々は、紙の書籍が自分たちに及ぼす効果を再認識しはじめているのかもしれない。

3.3 本のちから (竹盛)

「本 de 自分史」という企画のはじめは、ひとつのアンケートであった。三つの問いがあった。第一には、「記憶の糸を手繰って過去の記憶を呼び覚まし、その記憶の糸の端にある「最初の本」は何か」、第二には「次の1冊」、さらには「最後の1冊は何か」、という問いかけであった。

この三冊でもって「自分史」を語ることになるのである。結構大胆な企画ではある。

さて、私がピックアップしたのは、以下の三冊であった。

- ① モーツアルトの伝記 (出版社等不明)
- ② 竹内芳郎『言語・その解体と創造』(筑摩書房 1972.9)
- ③ 椎名 誠『定本 岳物語』(集英社 1998.8)

偉人伝シリーズの一冊だったように覚えている。音楽家を目指す筈もないのに、何故かモーツアルトの伝記を一冊、父が買い与えてくれた。きれいな包装紙に包まれていたような記憶がある。そのシリーズの他の本も読みたかったのだが、これ一冊であった。山村に育ったので、近所に書店などはなく、これが唯一の蔵書であった。ハードカバーの手触りは今でも覚えている。この一冊を何度も読み返した。小学校3年生の頃であっただろうか。

何故、父がこれを選び、何を期待していたのか、知るよしもない。

モーツアルトは、その音楽的才能を小さい頃から認められ、父親に連れられてヨーロッパ各地を巡り、当時のあらゆる音楽の流れの中に身を置いて、ついには18世紀音楽の完成を遂げる。読みながら、モーツアルトの歓びと、その羽ばたくエネルギーを感じ取り、自らに置き換えてみて、ふるさとの山野の外にはおおきな世界が広がっているというような思いを抱いたのである。

中学校からふるさとを離れて学び、そうして大学に入ったときには、父はことさらに喜んでくれた。

昭和48年、大学に入って間もなく、当時の教養部の授業で紹介された幾つかの書物の中に、『言語・その解体と創造』があった。今もこの本は、私の書棚に並んでいる。国語教師となって、書架には色々な種類の蔵書が並んでいるのだが、この本は他の本に決して埋もれることなく、大きな存在としてある。表紙見開きには、私の蔵書印が丁寧に押されている。大学ではその後、国語教育に関する様々な書物と出会うことになるのだが、なぜかこの本が私にとっては刺激的な最高の一冊の本なのである。

とにかく丁寧に、読破した。何カ所にも傍線を引き、余白には書き込みもしてある。読み尽くしたという感である。しかしながら、何を理解したのかは、完全に自信がない。少しはわかるのだが、やはりよくわからない。その難解さを確かめるために、その筋道を一心に辿っていたのだと思う。言い換えるならば、難しいということがわかる、ということなのか。

筆者竹内は、ソシュールに始まるそれまでの学問的言語論を否定して、その代わりに何か新しい実践的な言語論を探ろうとしているのであった。サルトルのアンガージュマン文学を再検討し、文学における言語表現に自由と創造力を見出そうというのであった。

この難解な一冊の本を、誰にも導かれることなく独りで読み進めるなかで、読み拓くことの醍醐味を知ったのである。大学での専門が始まっていない時期に、これはひじょうに刺激的であった。この言語との格闘によって、この本は、私の大学時代における最も忘れられない一冊となったのである。

昭和48年といえば、あの大学紛争の挫折と終息期の直後であった。この『言語・その解体と創造』はその時期に刊行された。「解体」と「創造」、新しい時代の可能性に託そうとすることを感ずることができた。

かくして私は国語教師となる。平成25年に退職するまで、多くの生徒に向き合い、国語教師としてのみならず、一教師として、生徒達の人生に関わることができた。

あるとき、一人の卒業生が、話を聞いてほしいと言ってきた。彼女は、中学高校時代は文学少女だった。本が好きであった。会って話を聞くと、「本を一冊ほしい」と言うのである。「先生から一冊本をもらって、病と戦いたいです」と言うのだ。

「わかった。少し待ってくれ。」と言って猶予を請い、私は早速に書店に向かった。さて、何を選ぶのか。しかも早くに。頭に浮かんだことは、ベッドの枕元に置いて手に取ることができる、本としての存在感、その感触。内容としては、重苦しくないもの。さて。何軒か書店を巡り、決めたのが、椎名誠の『岳物語』であった。表紙は茶色で、分厚かった。

『岳物語』であった、とはいうものの、この度の図書館セミナー「本 de 自分史」の依頼を受けたときにはその記憶がやや不鮮明であった。そこで、改めて彼女に電話して、書名を聞いた。もちろんのこと、彼女は病に打ち勝って、今はまったく不安なく、幸せに暮らしている。彼女は即座に、答えてくれた。今も大切にしているその本を電話の口に持ってきて、正確に『定本 岳物語』と確認しながら、懐かしく昔話になったのである。「どうして先生は、あのとき『岳物語』を選んでくれたのですか」という質問も帰ってきた。

『岳物語』は、岳少年の成長が、作者の父親である視点から描かれている。子を思う親の気持ちがよくわかる。そんなところがあって、選んだのであった。でも大事なものは、求めに応えることであると思ったのである。本という、その内容だけではなくて、その〈モノ〉としての存在。その感触。さらには、触ることができなくても、目を閉じて見えなくても、その贈られた〈モノ〉に込められた〈精神〉のちからを、信じたのである。

彼女は言った。『岳物語』では父親なのだけど、自分は母親として、私の子どもたちのために、生きなければならないと思ったのだけど、それが先生の願いだったのですか、と。

そうなのだ。そういうふうに、受け取ったのだ。それはそうだ。でも、それだけではない。

今も大切に、その『岳物語』は、彼女の日常において、彼女の目の前に在る。

「本 de 自分史」という企画のサブタイトルは、「もうすぐ絶滅するという紙の書物について」であった。「紙の書物」はなくなりほしくない。「紙の書物」が「在る」ことが必要であるのだ。

ところで、私の三冊は、どこかで「父」がかかわっている。

父は、幼い私になぜモーツアルトの本を買い与えたのか。父はすでに他界したが、その遺品を最近になって見つめてみると、父の青春の可能性を奪ったものが何であったのかが、わかる。その父の戦後において、父は子どもに夢を託すのであったが、そこに「本」があったのである。それが、父の想いだったのだと、今となって私は知るのである。

「本 de 自分史」という企画が四冊目の本の選定を求めてくるならば、私は迷わず次の一冊をあげるであろう。小熊英二『生きて帰ってきた男 —ある日本兵の戦争と戦後』(岩波新書 2015.6.19)、帯には「「生きられた 20 世紀の歴史」がここに——」とある。筆者小熊英二が、自らの父の人生を通して、それを描き出した本である。

本には人を生かす、大きな可能性がある。

4. 総合考察

ここでは三者の論に「横糸を通す」作業を行う。具体的な手続きとしては、まず脇が各論への考察を行い、これを議論のたたき台として三者間で議論することで記述を洗練させた。ここでも往復書簡的なやりとりが実践されたわけだが、文字上だけでなく **face to face** の議論も平行して交わされたことは言うまでもない。

まずは、考察の端緒として、脇と若松の論を比較し検討することから始めたい。両者とも、自身の感情において、紙の本に対する何らかの優位性を認めている。それぞれ「危機感」「喪失感」という表現によって、自身の「読む」ことを中心に紙の本があることを表明している。この感情（論）を掘り下げようとするとき、若松は「読み手としての向き合いかた」に注目する。読み手が向き合う対象は物語でありエクリチュールなのだが、そこに〈書く - 読む〉行為における時間差や作者（の死）を見出す。

興味深いのは、この記述が、脇の言う「過去 - 〈いま・ここ〉 - 未来」×「書き手 - 読み手」という複線的な「読む」行為と重なる点である。脇が指摘する複線的な行為は、時間（水平方向）と関係性（垂直方向）を志向しており、その交点に物語が立ち現れるとする。だが、ここに若松の議論を重ね合わせると、物語が立ち現れる交点は二つの時間軸で構成されていることがわかる。すなわち、「読んでいた私」「読みつつある私」「読み終えた私」を結ぶ水平方向の「時間」と、エクリチュールを媒介とした垂直方向の「時間」である。脇が異なる概念で捉えた複線的な「読む」行為は、実はいずれも「時間」という概念で記述可能であったことになる。

さらに、両者の論は別の点でも奇妙に響きあう。まずは身体性である。若松が紙の本の優位性を再認識するにいたったのは、触覚、嗅覚、聴覚への刺激、すなわち紙の本が有する高い身体性に注目したからだ。一方、脇は、古本という存在をきっかけに、紙の本の特徴をその身体性の高さに求めている。くわえて、両者ともに「なぜ電子書籍ではダメなのか」「紙の本の存在意義とは何か」という問いに答える鍵は、「時間」と「身体」にあると考えている。二人の論に通底するのは、電子書籍と紙の本をめぐる、時間性と身体性の問題である。すなわち、この二つの概念が「読む」という行為や物語を追究する鍵でもあるということの意味する。

ほかにも、脇は「所有」という感覚／観念にも注目している。これは「愛着」や「意味づけ」と換言してもよいだろうが、若松もエーコの言葉を引用しながらまさに同様の指摘を行う。そして、この愛着への注目を踏まえて、若松は「記憶」にも言及する。紙の本こそが、所有者の記憶の刻印と自分自身の投影を可能にするというのである。このように両者の論を重ねあわせると、竹盛の論述をその具体例として捉え直すことができよう。このとき、父親や教え子との記述はひとつの物語（ナラティブ）として立ち現れてくる。竹盛の挙げる三冊「モーツアルトの伝記」『言語・その解体と創造』『定本 岳物語』（言うまでもなく、いずれも紙の本）には、竹盛自身の〈あ のとき・あそこ〉の姿と記憶が付与されているのである。

中でも、『定本 岳物語』が持つ教え子との物語は、議論に新たな視点と深化を用意してくれる。すなわち、電子書籍のデータは贈り物として成立するかという問題である。少なくとも論者三人は、「成立しない」と考える。世の中がどう移り変わろうとも、「先生から書籍データをもらって、病と戦いたいです」と願う教え子は、おそらく現れないのではないか。誰かの想いを託すのに、電子書籍ではその身体性の低さゆえに不十分だろう。父が子に託した夢ならなおさらだ。竹盛は、この贈り物という視点から、紙の本の特徴として「〈モノ〉としての存在。その感触。」「〈モノ〉に込められた〈精神〉のちから」を指摘する。そしてこの指摘は、脇と若松が論じた身体性の問題へと帰着するのである。

こうして、三者の議論は各論から総論へと止揚される。ただ、そこからこぼれ落ちるものもある。それは、今後の紙の本へのまなざしだ。興味深いことに、ここでも脇と若松は、今後の紙の本＝「選択肢」／「使い分け」、という認識で一致を見せる。一方で、竹盛は紙の本が「在る」ことへ積極的な意味を見出している。脇も「多数者の暴虐」への対抗を象徴するものとして紙の本の存在を評価するが、竹盛ほどの強い主張ではない。電子書籍と並ぶ選択肢の一つへと「格下げ」するのか、なおもその優位性を主張するのか、三者の認識はこの点において異なっている。むしろ、この異なりは悪いものではなく、むしろ今後の議論を誘発するものであると期待したい。

5. おわりに

本稿の目的は、「なぜ紙の本は「絶滅」してはいけないのだろうか」「本を読む」とはどういうことなのか」という問いに答えることにあった。三者の議論を通して得られた結論は、「本を読む」ことは身体性と時間性に根ざした行為であり、だからこそ紙の本の「絶滅」に危機感を覚えるのだとまとめられるだろう。また、「紙の本は（少なくともすぐには）絶滅しない」ことも結論の一つとしてくわえておきたい。

結論だけ見れば、巷に溢れる擁護論との差異を見つけにくいかもしれない。しかし、その種の感情論とは一線を画した議論であると考えている。巷に溢れる擁護論には、やはり大きな問題がある。論者の多くが、紙の本に高い価値を見出しながら「紙の本は必要か」と問うている、いわゆる疑似問題である点だ。本稿もその危険性は大きいに孕みながらも、総合考察を加えることで議論の相対化が図れたと考える。

しかし、本稿の議論には逃れきれない前提が潜んでいる。本稿の議論は、どのメディアを通して「読む」行為を実践するか、というものであって、その前提である「読む」ことには価値がある」という認識には相対化の手が及んでいない。私たちにとって「読む」ことは本当に必要なのだろうか。「読む」という行為／出来事そのものの価値が低下し、日常から消えていくということも考えられるのではないか。メディアの変容に伴う「読む」から「見る」への移行といった指摘（谷本 2005）も念頭におけば、次の仕事として「読む」ことのさらなる追究も視野に入ってくるだろう。

こうして考えてみると、本稿での議論は、文学作品と文学研究の存在意義へ鋭い矛先を向けるものでもあるだろう。「本」とそれを「読む」ことの価値に向けられた相対化のまなざしは、文学作品（物語）の必要性和それを研究すること／人への疑いのまなざしへと転化する。「役に立たない」などという愚にもつかない安直な批判は問題外だが、現在の文学研究はそれにすら有効な回答を出せないのではないか。その存在の危機こそが、紙の本と「読む」ことを窮地に追いやっていくのかもしれない。

参考文献

バルト, R. 1979. 『物語の構造分析』(花輪光訳)みすず書房

Baudrillard, J. 1981. *Simulacres et simulation*, Paris: Galilee. (=1984, 竹原あき子訳『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局)

Burke, S. 1992[2008]. *The Death and Return of the Author: Criticism and Subjectivity in Barthes, Foucault and Derrida*, Edinburgh: Edinburgh UP.

Eco, U. & Carrière, J.C. 2009. *N'espérez pas vous débarrasser des livres.* : Grasset & Fasquelle. (=2010, 工藤妙子訳『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』阪急コミュニケーションズ)

Eagleton, T. 1996. *Literary Theory: an Introduction*, Oxford: Blackwell. (=1997, 大橋洋一訳『文学とは何か』岩波書店)

池澤夏樹編. 2010. 『本は、これから』岩波新書

McLuhan, H.M. 1962[1965]. *The Gutenberg Galaxy : The Making of Typographic man*, Toronto: University of Toronto Press. (=1986, 森常治訳『グーテンベルクの銀河系』みすず書房)

Mill, J.S. 1859. *On Liberty*. (=1971, 塩尻公明・木村健康訳『自由論』岩波文庫)

Miller, J.H. 2002. *On Literature*, London: Routledge. (=2008, 馬場弘利訳『文学の読み方』岩波書店)

総務省. 2015. 『平成 27 年版 情報通信白書』

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/index.html> (2015 年 9 月 2 日閲覧)

Nietzsche, F. 1886/1887[1923]. *Jenseits von Gut und Böse. / Zur Genealogie der Moral*, Leipzig: Alfred Kröner Verlag. (=1993, 信太正三訳『善悪の彼岸 道徳の系譜』ちくま学芸文庫)

野家啓一. 2005. 『物語の哲学』岩波書店

Ong, W.J. 1982. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, London: Methuen. (=1991, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店)

Relph, E. 1976. *Place and Placelessness*, London: Pion. (=1999, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学』ちくま学芸文庫)

佐藤徳. 2014. 「未来は君の右手にある—身体化された時間概念—」『心理学研究』85-4, pp.345-353.

Schütz, A. 1945[1962]. On Multiple Realities. In *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, The Hague: Martinus Nijhoff. (=1985, 渡部光・那須壽・西原和久訳「多元的現実について」『アルフレッド・

シュッツ著作集第2巻 社会的現実の問題Ⅱ』マルジュ社, pp.9-80.)

———. 1954[1964]. Don Quixote and Problem of Reality. In *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, The Hague: Martinus Nijhoff.(=1980, 桜井厚訳「ドン・キホーテと現実の問題」中野卓監修『現象学的社会学の応用』御茶の水書房, pp.70-106.)

谷本奈穂. 2005. 「〈イメージ〉の生成という視覚経験—読む・ふれる・見る—」『社会学評論』55-4, pp.418-433.

出版科学研究所編. 2014. 『2014年版 出版指標年報』全国出版協会出版科学研究所

title

This is Not the End of the Book: Re-thinking after the “Hon de Jibunshi” Event

author (s)

Tadayuki Waki, Koji Takemori, Masaaki Wakamatsu

abstract

What is the *raison d'être* of the physical books today? This question incidentally generates even more questions –what does “reading books” mean, what is our attitude and behavior to “reading,” and above all what does “books” itself signify. These questions are a center of our argument.

This paper outlines our discussion at the event, held at the Fukuyama University Library in May 2015, and our subsequent discussion, returning back to the questions above. We concluded that there are two distinctive features of print books: its embodiment and temporality.

Interestingly, however, we each hold different views of the influence on the future of print and electric publications. We hope that our report and discussion here invites further dialogue.

keywords

electric books, embodiment, narrative, reading, temporality